

令和3年
8月31日

病害虫発生予報 9月号

茨城県病害虫防除所

薬剤散布時には周囲への飛散防止に努めましょう
～令和3年度茨城県農薬危害防止運動期間(6/15～9/14)～

< 目 次 >

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

大豆：べと病	1
サツマイモ：ナカジロシタバ	1
○大豆におけるべと病と紫斑病の防除について	2
○ミナミアオカメムシの発生について	3
○ナシ炭疽病の発生による早期落葉が発生しています	4

【その他の病害虫】

大豆、ナシ、ブドウ、果樹共通、抑制トマト、秋冬ネギ、共通害虫	4
--------------------------------	---

II. 今月の気象予報 6

最新の農薬登録内容は、農林水産省ホームページの
「農薬登録情報提供システム」(<https://pesticide.maff.go.jp/>)で確認することができます。

詳しくは、病害虫防除所へお問い合わせ下さい。
茨城県病害虫防除所 Tel :0299-45-8200
予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。



<https://www.pref.ibaraki.jp/nourinsuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>
フェロモントラップデータ随時更新中

I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

大豆

1. ベと病

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、発病度*（本年値 11.1、平年値 5.0）、発生地点率（本年値 67%、平年値 35%）は、ともに平年よりやや高い。

※発病度：病斑をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 発病初期からの薬剤防除を徹底する。
- ② 薬剤は、薬液が茎葉によくかかるよう十分な量で丁寧に散布する。
- ③ 発病程度は品種間差が大きく「里のほほえみ」は、「タチナガハ」に比べて発病しやすい傾向にある。

サツマイモ

1. ナカジロシタバ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 8月下旬現在、被害つる先率（本年値 42.4%、平年値 18.4%）は平年よりやや高い～高く、発生地点率（本年値 100%、平年値 66%）は平年よりやや高い。
- ② 8月下旬現在、100葉あたりの寄生虫数（本年値 1.4、平年値 1.9）は11年中2-3番目に多く（2番目と3番目は同じ値）、平年よりやや多い。発生地点率（本年値 40%、平年値 33%）は平年よりやや高い。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると薬剤の防除効果が劣るので、若齢～中齢幼虫の時期（つる先、上位葉に丸く穴の開いた葉が散見される時期）の防除に努める。例年9月に被害つる先率が増加するので、早めに圃場を観察して防除適期を逃さないように注意する。
- ② 薬剤散布の際は、幼虫が生息する葉裏までよくかかるよう十分な量で丁寧に散布を行う。

大豆におけるべと病と紫斑病の防除について

平成 31 年に奨励品種になった「里のほほえみ」は栽培・加工性に優れる反面、「タチナガハ」に比べてべと病が発生しやすい傾向にあります。また、紫斑病は、大豆の主要病害であり、開花期や成熟期に雨が多いと発生が多くなるので注意が必要です。

適期に薬剤防除を行い、子実への感染を防ぎましょう。

○べと病

[特徴]

雨の多いときに多発し、主に葉に発生して子実にも感染する。

葉では、はじめ円形または不規則な形の黄白色の病斑ができ、病斑の裏面には綿毛のような灰色の菌糸が盛り上がる。発病が激しいと葉は萎凋して落ちる。子実では、乳白色～黄褐色の菌糸や卵胞子でうすく覆われ、種皮に亀裂を生じることもある。

[防除対策]

- ① 発病初期からの薬剤防除を徹底する。
- ② 種子や被害茎葉は翌年の第一次伝染源となるので、収穫後の被害残渣は適切に処分する。
- ③ 収穫調製を丁寧に行い、被害粒を除去する。

○紫斑病

[特徴]

開花期や成熟期に雨が多いと発生が多くなる。特に、収穫期前の降雨が発病を助長する。

葉では、中肋や支脈に沿って紫黒色の小斑点ができる。莢では、円形または不正形の紫褐色～紫黒色の斑点ができ、莢が黄化する頃から子実での発病が始まり、子実ではへそ中心に紫色の病斑が生じる。

本年は 7 月上旬の降水量が平年と比較してかなり多く、圃場により播種日に遅れが見られた。それに伴い開花期もばらつくことが予測されるため、圃場をよく観察して適期に防除を行うよう注意する。

[防除対策]

- ① 防除適期は開花期の 20～30 日後頃である。
- ② チオファネートメチル剤(トップジン M 水和剤等)については、県内において耐性菌の出現が認められているため、それ以外の薬剤を使用する。
- ③ QoI 剤 (FRAC コード: 11) のアズキシストロビン剤(アミスター20 フロアブル等)、ピリベンカルブ剤(ファンタジスタ顆粒水和剤等)については、県内の広域で感受性の低下が認められている。防除に用いる場合には、耐性菌の出現を防止するため、連年使用を避け、防除効果の低下が認められる場合は、FRAC コードの異なる薬剤を使用する。
- ④ 2 回目の防除を行う際は、1 回目の薬剤と FRAC コードの異なる薬剤を散布する。
- ⑤ 収穫が遅れると発生が多くなるので適期に収穫する。

ミナミアオカメムシの発生について

昨年8月、県南地域の水稲圃場において本県では未発生のミナミアオカメムシ（写真1）の発生が確認された（令和2年9月28日付け 令和2年度病害虫発生予察特殊報 第1号参照）。その後、県南地域の大豆圃場でも発生を確認した。本虫は、広食性であり、水稲・大豆の他、野菜類や果樹類等多くの植物を吸汁することで知られている。

本年も、8月に県南地域の予察灯での誘殺および水稲圃場での発生を確認したため、今後、晩生品種の水稲や大豆、果樹等、他作物での発生が懸念されるため、注意が必要である。

[現在の発生状況]

- ① 令和3年8月、県南地域に設置した予察灯において、本虫が誘殺された。
- ② 令和3年8月、県農業研究所による水稲圃場のすくい取り調査において、県南地域で本虫が確認された。

[形態の特徴]

成虫の体長は12～16mmで、外見はアオクサカメムシによく似ており、小楯板上端に3つの白い斑点があることは共通している（写真2）が、触角の第3～5節の先半分が褐色（アオクサカメムシは黒色）であることや、腹部背面が一様に緑色（アオクサカメムシは一部が黒色）であること（写真3、4）で識別できる。成虫の体色には遺伝的変異があり、多くの色彩型がある。

[生態の特徴]

1～5齢幼虫を経過して成虫となり、国内では年3～4世代を経過する。成虫で越冬するが、最寒月の平均気温が5℃以下の地域では越冬できないとされている。

[被害の特徴]

成幼虫ともに口針で植物の汁液を吸汁する。水稲では穂を吸汁し斑点米を生じさせる。本虫は斑点米カメムシ類の中では比較的大型であり、低密度でも被害が大きくなるとされている。

[防除対策]

本種を確認した圃場では、必要に応じて各作物でカメムシ類に登録のある農薬で防除する。なお、農薬を使用する際は、農薬ラベルに記載の使用基準、注意事項等を確認の上使用する。



写真1 ミナミアオカメムシ5齢幼虫



写真2 ミナミアオカメムシ成虫
(円内の小楯板上端に3つの白い斑点)

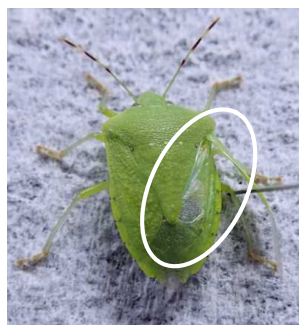


写真3 ミナミアオカメムシの腹部背面
(円内が一様に緑色)



写真4 アオクサカメムシの腹部背面
(円内の一部が黒色)

ナシ炭疽病の発生による早期落葉が発生しています

[発生及び被害の状況と発生条件]

近年、梅雨明け後の8月以降、「豊水」や「新高」で多発生し、早期落葉の原因となり、収量、品質に影響が出ている。

本病は葉（葉身及び葉柄）に発生し、果実には発生しない。はじめ葉身部や葉柄部に直径0.5ミリメートル～1ミリメートル程度の微小黒点を生じる。葉身部の斑点はその後拡大し、直径2センチメートル程度の大型病斑になる。発病葉はやがて黄化し、早期落葉する。

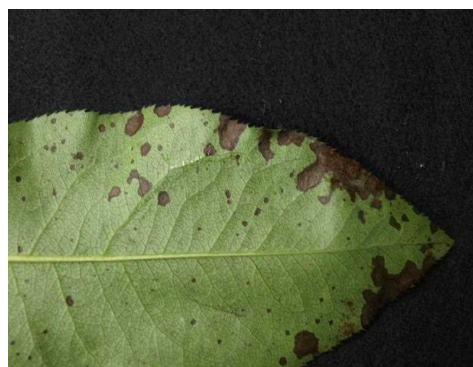
病原菌は、糸状菌の一種で、罹病落葉で春季に形成される分生子が飛散し、第1次伝染源となる。6月～7月に曇雨天が続くと多発生する。花芽および落葉で越冬する。「豊水」や「新高」では多発生し、「幸水」ではほとんど発生しない。

[防除のポイント]

- ① 本病原菌は、罹病落葉で越冬して翌年の一次伝染源となるため、落葉はほ場外へ持ち出し、適切に処分する。
- ② 次年度以降、5月～7月頃に薬剤防除を行う。



葉に発生した黒点病斑（表）



葉に発生した黒点病斑（裏）

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
大豆	チョウ目幼虫	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。
	吸実性カメムシ類	発生量：－	一部の吸実性カメムシの予察灯への誘殺数が水戸市でやや多い。 薬剤散布は、莢伸長期以降、発生に応じて7～10日ごとに複数回行う。

【その他の病害虫】(続き)

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
ナシ	黒星病	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。多発した圃場では、秋季防除を徹底する。特に、徒長枝に薬液が十分かかるように薬剤散布を行う。
	ナシヒメシクイ	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。早生・中生品種に被害果が目立った場合は、晩生品種を対象に、収穫前日数に注意して薬剤散布を行う。
	ハダニ類	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。多発している圃場では、秋季、休眠期および翌春の防除を徹底する。
ブドウ	さび病	発生量：－	病原菌の越冬を防ぐため、落葉処理を徹底する。
	べと病		
	褐斑病		病原菌の越冬を防ぐため、落葉処理を徹底し、粗皮はぎを行う。
	晩腐病		病原菌の越冬を防ぐため、罹病した果梗の切り残し、結果母枝、巻きひげ等は剪除し、適切に処理する。
共通果樹	果樹カメムシ類	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。
トマト抑制	黄化葉巻病	発生量：平年並	8月上旬現在、平年並の発生である。発病株はただちに抜き取り、適切に処分する。促成トマトの育苗において、媒介虫であるタバココナジラミの侵入防止対策を徹底する。
秋冬ネギ	黒斑病(葉枯病を含む)	発生量：平年並 ～やや多い	8月下旬現在、平年並～やや多い発生である。
	ネギハモグリバエ	発生量：平年並	8月下旬現在、平年並の発生である。
	ネギアザミウマ	発生量：平年並 ～やや少ない	8月下旬現在、平年並～やや少ない発生である。
共通害虫	オオタバコガ	発生量：平年並 ～やや多い	8月下旬現在、フェロモントラップへの総誘殺数は龍ヶ崎市および水戸市で平年よりやや多く、土浦市および坂東市で平年並～やや多い。
	ハスモンヨトウ	発生量：－	8月下旬現在、フェロモントラップへの総誘殺数は、龍ヶ崎市で平年より多く、鹿嶋市で平年並～やや多く、土浦市および鉾田市で平年よりやや少ない～少ない。

※ 諸事情により、一部予報内容を簡素化して発表しています。

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 8月28日から9月27日)

気象庁 (8月26日 発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	30	30	40
	降水量	関東甲信全域	40	30	30
	日照時間	関東甲信全域	30	30	40

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。

<1週目の予報> 8月28日(土曜日)から9月3日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

<2週目の予報> 9月4日(土曜日)から9月10日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率50%

<3週目から4週目の予報> 9月11日(土曜日)から9月24日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並の確率40%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類* (FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。
- 5 農薬の使用後は、散布器具やホース内等に薬液が残らないように良く洗浄しましょう。